

連声小考

崎村, 弘文
鹿児島大学教養部助教授

<https://doi.org/10.15017/10450>

出版情報 : 文献探究. 18, pp.1-5, 1986-09-18. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :



[nu] (例えば、撮[sɔnu]) である。

ロ) 捲音素は、両唇音・喉音の前以外では、前舌面の高まりを伴う[N]ないし[n]として実現される。

ハ) ロ)により、下記のような“連声”を生じる²⁾。

- ／～N／+ja (は) → njja (ex. 海～?uNnja cf. 道～mitfa:)
- ” +ji: (か?) → njji: (ex. ?uNnji: cf. mitfiji:)
- ” +jeibjuN (です) → njeibjuN (ex. ?uNnjeibjuN cf. mitfijeibjuN)
- ” +jeigisai (らしい) → njeigisai (ex. ?uNnjeigisai cf. mitfijeigisai)
- ” +jantfun (なんか・ぐらい) → njantfun (ex. ?uNnjaantfun cf. mitfantfun)
- ” +je:kuNnja (ほど) → nje:kuNnja (ex. ?uNnje:kuNnja cf. mitfije:kuNnja)

同方言には、連母音の後半部を形成するもの以外に単独の母音というものは存せず、その前に必ず?(→弱いながら存)等何らかの子音を伴う。したがって、捲音はその直前に立つことができず、捲音+ア行音の連声現象というものは存しない。また、英語の場合と同様、捲音+[w-]に関しては連声現象が起きにくいようである。

これは、中世末期に存したとされる捲音の連声のうち<+ヤ行音→ナ行音>にごく近いものと見ることができる。

琉球諸方言の捲音はヌ・ニ・ル・ミ等の音節が変化して生じたものであるが、多くの方言においてしばしば弱化・脱落を起こしたもののようであり、同方言のようにそうした傾向が抑えられた例は稀である³⁾。本土でも、事情はほぼ同様で、[n] (<ヌ・ニ・ノ・字音韻尾n等)であったはずのものがいつの頃からか十分な閉鎖を伴わなくなり、ついには軟口蓋音の前や語末に現れる[N~ɾ]に紛れることとなったものであろう。九州方言に見られる、「～さん^は」「本^を読む」といった形態音韻論的な連声現象は、わずかにそのおかげを伝えるものであるが、それが琉球に隣り合う地域で行なわれている点、実に興味深い。

なお、琉球方言には、別種の連声現象も見られる。沖縄県平良市前里(池間島)方言の例がそれで、たとえば次のようである。

[umagama^ɳaiba^ɳtuiku:] そこに有るから取って来い。
([uma]「そこ」/[gama]小さいものまたは好ましいものを示す名詞に付される接尾辞/[N] <格助詞[ni]/[aiba]直訳「有れば」/[tuiku:]「取って来い」)

これは、同方言において?が弱化・脱落した結果、本土方言と同様 単独の母音が存在するようになり、なおかつ[N]の閉鎖が強いせいで、[N]+ア行音の連声現象が生ずることとなったものである。上記与論町方言のそれとは、渡り音の響きが異なるので、明確に聞き分けることができる。

結局、母音・半母音に前接する捲音(鼻音)が[n][ɾ]のいずれであれ、強い閉鎖を伴うものであれば、“連声”を生じ得るわけであるが、後者のそれが中世末期の連声と趣を異にするものであることはあらためて指摘するまでもあるまい。

ところで、琉球方言には語末に立つ捲音[m]も存するが、管見の限り、それによる連声現象の例を見ない。そのことは、やはり該[m]が強い閉鎖を伴うものでないことに

該促音は、(ちょうど喜界町・与那国町兩方言に見るように、)後続の子音に付随して発音される無氣の入り渡り音の如き位置を占めるにすぎず、やがて弱化・脱落する(或後続子音に吸収される)こととなった。後に、多くの方言で、促音が音韻として次第に明確に把握されるようになったが、既にその頃にはテ・タ接続形の促音は全く失なわれてしまっていた。

ところで、中世末期日本語の促音 $-t$ が仮に上記兩方言に見るようなものであったとすれば、如何であろうか。果たして、連声は起きたであろうか？

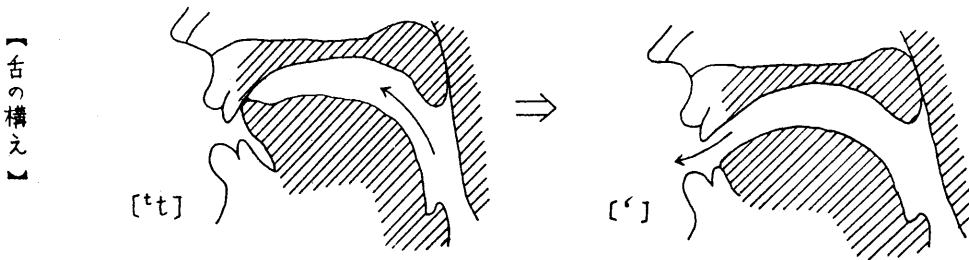
——種々の点から見て、どうもそのようには思われぬ。

例えば、同期日本語の促音連声の特徴として、 $\langle -t + \text{アヤワ行音} \rightarrow -t t - \rangle$ であつて $\langle -t - \rangle$ ではないということが有るが、もし $-t$ が無氣のものであったとすれば、(恰度朝鮮語がほぼそうである $= \text{ex. } -k + i \rightarrow -g i =$ ように) 後者のかたちを取つたと見るのが自然である。

また、仮に $-t t -$ のかたちが生じたとしても、第1の t の存在はきわめて不安定で、かつての琉球方言のそのように脱落するか、或るいは朝鮮語の濃音のようなかたちに移行するか、の新たな変化を生じた可能性が少なくなかつたはずである⁶⁾。しかし、現実には、そうした変化が起きた徴証は認められない。

他方、鹿児島方言に存するヨカッタッド<良カト有ルド(直訳:良いの(で)あるぞ)の如き連音変化は、過去における同方言の $t o > t u > t y \sim t$ の狭母音化・無声化に基づく一種の“連声” ($-t y \sim t + a \rightarrow -t t a -$) と見られ、やはり促音が有氣の場合には連声現象が起こり得ることを明白に示している。

音響音声学的見地からも、有氣の促音について連声が起こりやすく無氣の促音についてそうでないのが自然であることは、十分に説明される。即ち、有氣の促音の場合、いったん閉鎖が行なわれた後、外破がなされる関係上、単独でも $[-t t ']$ のようなく長めの閉鎖 $>$ のかたちを取りやすく、それに母音・半母音が接続してそのまま安定すれば、音韻として $/-QCV-/$ の如く(現代日本・中世末期日本のいずれにおいても)把握されるはずの音声⁷⁾が成立するのに対し、無氣の促音の場合には、例えば上記朝鮮語や中国南部諸方言(ex. 福建方言・広東方言)の入声韻尾がそうであるように、持続時間が短く聞こえの弱いものである結果、母音・半母音が接続しても、音韻として $/-CV-/$ のかたちで把握される音声⁸⁾が成立するのがやっとなのである。つまり、後者は、リエゾンを生じても連声は生じないことになる。



2. 関連する問題

以上のように見て来ると、連声が まず音声学的現象として成立したものであったことは、おのずから明らかである。

音声学的現象であったとすれば、それは、いつの頃からか存在していても、音韻のレベルで捉えられるまで一般の表記には反映されなかつた可能性が高い。したがって、その成

立時期がいつであったか文献によって知ることは困難であるが、捲音の連声につき「日本語の捲音が閉鎖の強い [n] であった時期以後」とし、促音の連声につき「-t が有気であった時期以後」とすることはできる。奥村三雄氏ほかによって説かれる如く、捲音の成立が漢語に影響されてのものであり、またその音価が当初該 [n] のようなものであったとすれば、前者の時期は漢語の渡来時に始まるということになる。後者の時期についても、ほぼ同様に考えるのが最も蓋然性が高いであろう。

その場合、若干の問題が生じる。上記のように考えて来ると、日本に渡来した漢語の鼻音韻尾（→捲音）には強い閉鎖が伴ない、また入声韻尾 -t（-p・-k? →促音）には強い気音が伴なったことになるが、一方、現代漢語諸方言・朝鮮語借用漢字音等に見るそれらは弱い閉鎖・無気のものであり、全く逆とも云える特徴を伝えているからである。

これについては、さまざまな考え方を取ることができそうであるが、筆者はひとまず次のように考えて置きたいと思う。即ち、漢語・朝鮮語借用漢字音についても、かつては日本渡来の漢語に見られたと同様の特徴が存したが、後に次第に閉鎖・出気が弱くなり、ついには他の韻尾と混同したり脱落したりするものも生じることとなったのであろう、と。そのことは、現に漢語・朝鮮語借用漢字音においてそのような変化が進みつつあることを見ても明らかであるが、いずれ文献に見える徴証を提示してみたいと思う。

リエゾンを持つフランス語も、過去に同様の語末子音の弱化・脱落を起こし、わずかに熟語形の中に過去の連音現象の様相を伝えているものである。あまり遠くない未来に朝鮮語がそうした状態に到ることも、全く考えられないではない。

まとめ

中世末期日本語の連声は、もともと、母音・半母音に続く捲音・促音の閉鎖・破裂の残響によって生じた音声学的現象であったと考えられる。

その淵源は日本への漢語渡来の時期に遡るものと見られ、当初は表記に反映されなかったものと思われる。後に、それが徐々に表記されるようになるのは、捲音・促音の閉鎖・破裂が弱まって連声の音声学的現象としての体系性ないし普遍生起性が崩れ、人々の意識においてその表記のあり方が問題とされるようになった結果であろうと思われる。

それらのことは、過去の言語現象の一部を掘り取ったにすぎない文献の徴証のみによっては、明らかにすることができない。やはり、生の言語についての知見を生かすこと無く言語史の記述を志すことには、大きな無理が有ると云わざるを得ないのである。

【注】

- 1 いずれの場合も +w 行音に関して [-w] の脱落が見られるが、その主な原因が、当時の日本語の音韻論的性格 — / n̄wa ~ n̄'a / / t̄wa ~ t̄'a / といった音韻が無く、連声現象によってその音声形に相当するものが生じても、近似の音韻によって受け入れたであろう — に在ることは、云うまでもない。
- 2 +以下については、音声を示す記号 [] を省略した。
- 3 その原因については種々のことが考えられるが、全て別稿に譲る。
- 4 詳しい考察は、別稿に譲る。
- 5 詳しくは、「鹿児島大学文科報告」21号の拙稿参照。
- 6 濃音のようなかたち（音声）に移行しても、それが新たな音韻としての地位を獲得し得たとは思えないが。